

複文とフォーカス
遠藤喜雄 (神戸外国語大学)
endoling@gmail.com

0.はじめに

本研究：科研のプロジェクトの一環（＝世界にあまり知られていない日本語学の優れた研究成果をシンプルなカートグラフィーの理論で洗練して、世界に発信する。）

本発表の構成：

- (i) 日本語の副詞節の構造を見ながら、それを体系化する。
- (ii) 日本語と英語の副詞節における複文構造を類型論の立場から考察し、論点を紹介する。
- (iii) そこに見られる問題を益岡 (1997) の考えを洗練することで、解決する。

0. 日本語の階層性と副詞節の背景

日本語の文末形式は規則的に配列されている（＝階層構造を持つ）。(野田 1987, 益岡 2010)

1. 並べ+られ+てい+な+い+ようだ+ね。

動詞 + ボイス + アスペクト + 否定 + テンス + 話し手ムード + 対人ムード

体系化：述語から始めて、低い機能語から一つ一つ結合しながら、階層を形成 (Merge)

cf. 各階層＝箱のような物

2. a. [述語の階層 並べ]=小さい箱

b. [ボイスの階層 [述語の階層 並べ]+られ]=大きい箱

☞大きい箱に小さい箱は入れられるが、小さい箱に大きい箱は入れられない。

=>小さい箱の要素が大きな箱の要素の前に生じる。

3. 階層/箱の大きさ

ボイス < アスペクト < 否定 < テンス < 話し手ムード < 対人ムード

(対人ムードについては、Endo (2011a) を参照)

カートグラフィーの発想：意味と形（＝音声）とを機能語を介してストレートに結ぶ。

形がなくても音声の意味効果を持てば機能範疇を想定する。

命令の事例：食べ+ろ（＝命令の階層：発音される）cf.よく食べる/食べる～（感嘆）

（さっさと）食べる+!（＝命令の階層：強調のイントネーション）

4. 南 (1974) の副詞節の分類：副詞節の内部に (3) の機能語のどこまでが含まれるか
 A類 ボイス (例) [批判+され]-ながら vs. *[批判され+てい]-ながら
 B類 ボイス、アスペクト、否定、テンス
 (例) [批判されてい+な+かった]-時 vs. *[批判されてい+な+かった+だ+ら+う]-時
 C類 ボイス、アスペクト、否定、テンス、話し手ムード
 (例) [批判されてい+な+かった+だ+ら+う]が vs. *[批判されてい+な+かった+だ+ら+う+ね]が
5. 野田 (1989)：南の内部構造の視点に加えて、それと副詞節が主文のどの要素と呼応することの間に相関性があることを指摘

	ボイス、アスペクト、否定、テンス、話し手ムード				
ながら	○	×	×	×	×
ずに	○	○	×	×	×
ば	○	○	○	×	×
とき	○	○	○	△	×
ので	○	○	○	○	×
が	○	○	○	○	○

6. (テレビを見ながら) ご飯を食べている/*食べ始める
- 呼応
-

一般化：アスペクトタイプの副詞節 (=ながら節) は、主文のアスペクト成分と呼応し、その内部にアスペクトの下機能語 (=ボイス) を含めることが可能。

7. (良く見ずに) 買った/*買わなかった.
- 呼応
-

一般化：肯・否定タイプの副詞節 (=ずに節) は、主文の肯・否定成分と呼応し、肯・否定の下機能語 (=ボイス、アスペクト) を含めることが可能。

以下、(5) の他の副詞節に関して同じ趣旨の一般化が成り立つ。

予測：副詞節が主文の低い階層の機能語と呼応=>述語に近い位置に生じる。
 副詞節が主文の高い階層の機能語と呼応=>述語から遠い位置に生じる。

- 8 a. [雨が降れば][外に行かず]家にいる。
 a'. *[外に行かず] [雨が降れば]家にいる。
 b. [休講になった時][図書館で本を読みながら]過ごした
 b'. *[図書館で本を読みながら] [休講になった時]過ごした (Endo 2011 b)

野田のパラダイムを体系的に説明：

副詞節の作り方:(i) 主文と同様に、副詞節も動詞から始めて、下から機能語を結合して形成。
(ii) 副詞節の主要語(「ながら」「とき」)は呼応する機能語の位置に生じる。
(例) ながら節はアスペクト、とき節はテンス。

9. ボイス < アスペクト < 否定 < テンス < 話し手ムード < 対人ムード
ながら ずに とき が

☞副詞節の主要語が文末の接続詞の位置に移動する際、他の機能語を飛び越すと局所性の原理 (locality principle) の違反が生じる。
そのため、主要部より上の機能語は、副詞節の内部に生じない。(Endo 2011c)

cf. 英語の副詞節については、遠藤 (2009) を参照。

2. 理論言語学における副詞節の複文構造の論点: 類型論の観点から

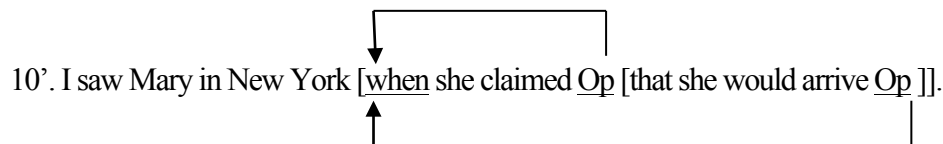
(A) 英語の時の副詞節内部が複文構造を持つ場合=> 2つの解釈が可能

10. I saw Mary in New York [when he she claimed [that she would arrive]].

高い解釈: 彼女が claim した時

低い解釈: 彼女が arrive するはずの時

Larson (1990) の分析: 時の演算子が, claim の節 (=上の節) と arrive の節 (=下の節) から when の位置へ移動する2つの可能性がある (多義性の出所)。



時の演算子が移動している証拠

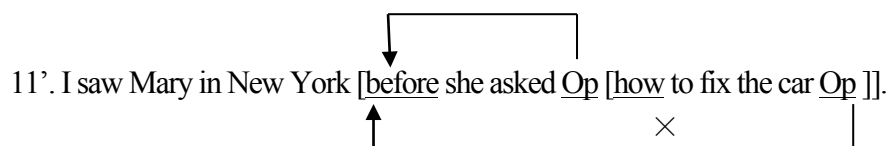
☞ wh を飛び越しての移動は不可能 (移動に課される wh 島の制約)

☞ 時の副詞節においても, when と演算子の間に wh 句が生じると, 解釈が不可能となる。

11. I saw Mary in New York before she asked how to fix the car.

=>高い解釈: ask する前=可能

低い解釈: fix する前=不可能



論点: 日本語では, arrive するはずの低い解釈がない。

12. ジョンは、[シェイラが[彼が出かけるべきだと]言った]時、出かけた (Endo 2011b)

=>高い解釈：言った時=可能

低い解釈：出かけるべき時=不可能

Miyagawa (2011): 副詞節に「に」が結合すると、高い解釈と低い解釈が可能になる。

13. ジョンは、[シェイラが[彼が出かけるべきだと]言った]時に 出かけた。(Miyagawa 2011)

=>高い解釈：言った時=可能

低い解釈：出かけるべき時=可能

Miyagawa (2011)：なぜこのような効果が生じるか不明と述べている。

本発表の主張：益岡 (1997) の考えを洗練することにより、(12) と (13) の違いは、
普遍文法の諸原則により説明が可能

3. 説明：解決の糸口=益岡 (1997)

益岡(1997)の知見：(I) 副詞節に助詞が結合されると、副詞節がフォーカスになる。

(II) すると、副詞節内部に生じる疑問詞が主文と結びつく解釈が可能に。

益岡の知見 (I)

14. a. [由起子に電話したあと] この手紙を書いた。(益岡 1987: 141)

b. [由起子に電話したあと]+で この手紙を書いた。

フォーカス

益岡の知見 (II)

15. a. ?[誰に電話したあと] この手紙を書いたのですか?

b. [誰に電話したあと]で この手紙を書いたのですか?

cf. [由起子に電話したあと] (で) この手紙を書いたのではありません。

益岡の知見 (I) を説明

普遍文法の原則1：任意の文法操作は、新たな意味効果を生み出す (=経済性の原理)

Optional operations create a new semantic effect. (Endo 2007, Fox 1999)

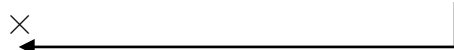
=>副詞節は必ずしも助詞を必要としない。任意の助詞を結合する操作が、新たな
フォーカスの意味効果を生み出す。

益岡の知見 (II) の前半を説明

普遍文法の原則2：動詞に選択されていない要素からは移動は禁じられる。

(Condition on Extraction Domain (CED), Huang 1982)

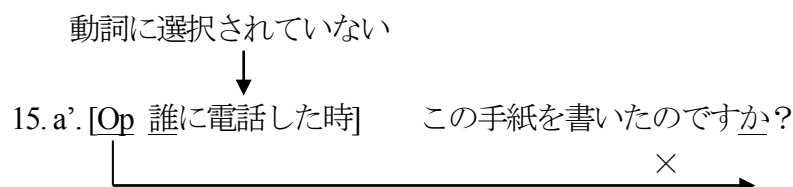
英語の場合：*Who did you see Mary [before you met ___]?



日本語の場合：演算子 (Operator: Op) が疑問の助詞「か」の位置まで移動する
...誰...か... (Endo 2007, Watanabe 1992)
Op→

⇒副詞節の内部に生じる疑問詞「誰」から演算子 (Op) が主文の「か」まで移動する。

⇒原則2 (=CED) により、この移動は非合法的なので、非文法性が生じる。



益岡の知見 (II) の後半を説明

Nishigauchi (1990): 日本語や韓国語は、疑問詞を含む句が疑問の助詞と解釈される操作を持つ。
(=large scale pied-piping)

16. A: 先生は[授業中に何を食べた学生]を叱ったのですか？
B: ハンバーガーを食べた学生です

⇒同じ操作により、フォーカスの副詞節も、副詞節全体が疑問の助詞と解釈される。

副詞節全体が疑問のフォーカスになっている証拠：副詞節全体を答えることができる

17. A: [誰に電話したあと]で この手紙を書いたのですか？
B: 次郎に電話したあと(で)ですよ

Q: なぜ副詞節に助詞が結合されると、副詞節に高い解釈と低い解釈が可能となるのか？
(=宮川効果)

Miyagawa (2010) の移動の類型論: (i) 英語などのインドヨーロッパ系の言語では、人称、数、性などの一致に関わる素性が移動の引き金 (trigger) になる。
(ii) 日本語などの談話に卓立した言語では、談話に関わるフォーカス等の素性が移動の引き金になる。

提案：任意に副詞節に結合された助詞は、フォーカス句を形成し、そのフォーカス句が時の演算子が移動する引き金になる。

✧ Subordinator Phrase の上に Focus Phrase がある。 (Endo 2011d)

18. a. [フォーカス句 [副詞節...時] に]

← (＝言った時)

b. [フォーカス句 [文2 時の演算子 [文1 時の演算子 彼女が着くはずだと]言った時]に]
← (＝着くはずの時)

☞ 副詞節に助詞が結合されないと、フォーカス句も生じないので、時の演算子を移動する引き金がない。そのため、低い解釈が生じない。

Cf. 仮に助詞が結合されない副詞節に時の演算子が生じても、その演算子は移動できない。演算子-変項 (operator-variable) という合法的な演算子が形成されない。

4. 帰結：益岡 (1997) のさらなる貢献の可能性を探る

益岡流の考えで理論言語学に新たな知見が期待できる

Haegeman (2011): 条件の副詞節には、時の副詞節に見られる2つの解釈はない
19. I will leave if you say you will.

Pancheva (2002): 英語の条件の副詞節は助動詞の移動と連動している
20. Had he said he would leave, I would have left.

Haegeman 2010, Bhatt and Yoon 2002 : 助動詞の移動は単一の文中で生じるので、条件文での演算子の移動も一文中に限られる。

予測：日本語の条件の副詞節は、助動詞の移動と連動していないので、条件の副詞節がフォーカスに解釈できれば、英語と異なり、低い解釈が可能はず。

21. a. (?) [誰が来るなら]君も来ますか?

b. (?) [[夜中に雨が降ると]言う]なら、次の朝は地面が濡れているはずですね。(低い解釈)

22. a. [[誰が来るのならば]君も来ますか?

b. [[夜中に雨が降ると]言うの]ならば、次の朝は地面が濡れているはずですね。
(低い解釈)

Cf. [夜中に雨が降るか]と]きくの]のならば、その答えを考えてみましょう。(高い解釈)

Appendix. 日本語の副詞節のさらなる貢献の可能性：真性モーダルと疑似モーダル

1. a. [太郎が本を並べている]だろう。(真正モード)

b. [太郎が本を並べている]ようだ。(疑似モード)

2. a. 真正モーダル：ろう（発話伝達）、まい（意志）、な（禁止）、よう（認識）
 b. 擬似モーダル：のだ、はずだ、ちがいない（cf. 井上 2009）

特徴1：過去形の有無 (non-past form)

3. a. *[[太郎が本を並べている]だろうた。(真正モーダル：過去形を持たない)
 b. [[太郎が本を並べている]ようだった。(擬似モーダル：過去形を持つ)

特徴2：唯一性 (uniqueness)

4. a. *この山に登ろう まい (真正モーダル：一文中の一つのみ)
 b. *今回の会議は欠席しよう まい
 c. 佐藤さんの任用は拒否されたのだそう です。(擬似モーダル：多重が可能)
 d. 犯人が現れるに ちがいない わけだ から

特徴3：線形順序 (linear order)

5. a. 山に昇るに違いない+だろう (擬似モーダル+真性モーダル)
 b. *山に昇るにだろう+違いない (*真性モーダル+擬似モーダル)

ポイント：Cinque (1999) など現代の理論では、今のところ統語的な「認識のモード (epistemic mood)」は、1つしか認定されていない。

☞示唆：統語構造には「認識のモード」に関して2つの認識のモーダルの位置 (=「擬似モーダル」と「真性モーダル」)がある可能性を示唆している

6. a. 本が並べられているにちがいない+だろうが、... (擬似+真性)
 b. 本が並べられているに違いない/*だろう時に、(擬似/*真性)

☞「が」節は、擬似モーダルを含むことは可能だが、真性モーダルを含むことは不可能。

7. [true epistemic modal phrase [pseudo epistemic modal phrase]]

同じ区別は、理由の副詞節にも見られる。

8. a. 行くに違いない{から/ので} (擬似)
 b. 行くだろう{から/*ので} (真性)

参考文献

- Bhatt Rajesh, Yoon, James. 1992. On the composition of Comp and parameters of V-2. In *Proceedings of WCCFL, Bates, Dawn. (ed), CSLI, Stanford, 10: 41-53.*
- Cinque, Guglielmo. 1999. *Adverbs and functional Heads: A cross-linguistic perspective.* Oxford: Oxford University Press.
- Endo, Yoshio. 2006. *A study of the cartography of Japanese syntactic structures.* Ph.D. dissertation. University of Geneva, Switzerland.
- Endo, Yoshio. 2007. *Locality and information structure.* Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 遠藤喜雄. 2009. 「話し手と聞き手のカートグラフィー」『言語研究』139号. 日本言語学会.
- Endo, Yoshio. 2011a. “Illocutionary force and discourse particle in the syntax of Japanese,” to appear in W. Abraham & E. Leiss (eds.) *Modality and theory of mind elements across languages.* Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Endo, Yoshio. 2011b. “A cartographic approach to head movement: A case study of adverbial clauses,” to appear in B. Suranyi (ed.) *Domains at the interfaces of narrow syntax.* Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Endo Yoshio. 2011c. “The syntax-discourse interface in adverbial clauses,” to appear in L. Aelbrecht, L. Haegeman and R. Nye (eds.) *Main clause phenomena: State of the art.* Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Endo, Yoshio. 2011d. The functional projections of 'why' and the CP zone. Invited talk, State of Sequence 2. University of Tromsø, Norway.
- Haegeman, Liliane. 2011. The movement derivation of conditional clauses. *Linguistic Inquiry 41: 595-621.*
- 井上和子 2010. 『生成文法と日本語研究』東京：大修館.
- Larson, Richard. 1990. Extraction and multiple selection in PP. *The Linguistic Review 7: 169-182.*
- 益岡隆志. 1997. 『複文』東京：くろしお出版.
- 益岡隆志. 2010. 「名詞修飾節と文の意味的階層構造」北海道大学におけるワークショップでの口頭発表.
- Miyagawa, Shigeru. 2010. *Why Agree? Why Move? Unifying Agreement-based and discourse configurational languages.* LI Monograph 54. MIT Press.
- Miyagawa, Shigeru. 2011. to appear in L. Aelbrecht, L. Haegeman and R. Nye (eds.) *Main clause phenomena: State of the art.* Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Nishigauchi, Taisuke. 1990. *Quantification in the theory of grammar.* Dordrecht: Kluwer.
- 仁田義雄. 1987. 『日本語のモダリティーと人称』東京：ひつじ書房.
- 野田尚志. 1989. 「文構成」宮地裕（編）『講座日本語と日本語教育2』東京：明治書院.